

事例報告：ある身体障害者更生施設の取り組みと生活訓練指導員の関わり

内田まり子（公益財団法人日本盲導犬協会）

小関 美子（身体障害者更生施設静和園）

原田 敦史（公益財団法人日本盲導犬協会）

1. はじめに

公益財団法人日本盲導犬協会仙台訓練センター（以下、訓練センター）では、盲導犬育成貸与事業の他、視覚障がいリハビリテーション事業を行なっている。

そのうちの在宅訓練では、施設を訪問して訓練を実施する事例もある。中でも宮城県亘理郡の身体障害者更生施設「静和園」（以下、静和園）においては、2004年から断続的に視覚障がいの利用があり、訓練センターとの関わりが続いている。さらに現在では「視覚障害者の集い」が開催されている。ここでは、静和園における受け入れと集い開催に至るまで経緯、集いの様子、訓練センターの生活訓練指導員との関わりを紹介し、新たに視覚障がい者に向けた支援を展開することが可能となった事例について報告する。

2. 静和園の概要

旧法施設支援事業、短期入所事業、自立訓練（機能訓練）事業を実施している。定員は障害者支援施設50名、短期入所4名、自立訓練（機能訓練）10名である。

施設利用者は理学療法や作業療法、言語療法の他、社会リハビリテーションとして公共交通機関の利用・買い物などの訓練を受けることができる。利用者のほとんどが肢体不自由およびその重複障がいであり、定員はほぼ満たされている状況である。

3. 経過

（1）視覚障がい者の利用開始

2002年5月、Aさん（50歳代男性、身体障害者手帳1級）が入所した。静和園ではそれ以前に高齢で視覚と肢体不自由の重複障がいのある利用者がいたことはあるが、すでに別の施設に移っており、単独で移動できる身体状況である視覚障がい者の受け入れは初めてだった。当初、Aさんが居室から移動するときには職員が付き添っていたが、喫煙所まで好きな時に行きたいという強い希望が出された。居室前に手がかりをつけるなどして配慮した結果、単独で喫煙所の移動が可能となったが、職員としてはこの方法で良いのか、また、屋外に出る時はどうしたら良いのかなど不安が残った。対応を模索していたが、Aさんの住所が仙台市内にあったため仙台市中途視覚障害者在宅生活訓練事業の利用を検討、同年9月、職員が訓練センターを訪問し、在宅訓練についての説明を受け、職員研修について打ち合わせをした。後日、訓練センター生活訓練指導員による職員対象の視覚障がい者への対応についての研修（声かけ、着席や送迎車乗降の手引き、アイマスク体験等）を実施した。

訓練については仙台市障害者更生相談所が同席して生活訓練指導員が事前面接を実施後、週に1度、1時間半程度の白杖歩行訓練を開始した。内容としては白杖の基本操作、施設内の歩行、施設外周の散歩コースなどだった。

（2）その後の利用者の経緯

2003年10月、Bさん（50歳代男性、1級）デイサービス利用開始、白杖歩行訓練を開始し

た。住所が仙台市以外の宮城県であるため、利用した事業としては宮城県在住者対象の訪問訓練事業となる。以下、訓練はすべてこの事業である。

2004年6月、Cさん(40歳代男性、1級)デイサービスショートステイ利用開始。本人の希望がなかったため訓練は利用していない。

同年12月、Dさん(50歳代女性、1級)デイサービス利用開始。翌年1月、点字訓練を開始した。

2005年7月、Eさん(20歳代男性、1級)デイサービス利用開始、白杖歩行訓練を開始した。

2006年7月、Bさんパソコン訓練開始。

2007年4月、Aさんが障害者支援施設へ入所し、静和園を退所した。

同年9月、Eさんパソコン訓練開始。

2009年12月、Eさん2回目のパソコン訓練開始。

2010年4月、Fさん(60歳代男性、1級)入所、白杖歩行訓練開始。

同年7月、Gさん(60歳代男性、1級)が集いに試し参加、その後デイサービス利用開始。

同年9月、Hさん(50歳代男性、1級)白杖歩行訓練を開始。

同年10月、Iさん(30歳男性、1級)集いに試し参加予定。

2002年から2010年までの8年間に、試験的な利用も含めて合計9名の視覚障がい者が静和園を利用した。利用後、自宅での訓練を受講した方はBさん1名、利用前に自宅での訓練を利用していた方はGさん1名だった。視覚障がいを持つ利用者が増えるにつれ、受講した経験を伝えあって励ましあったり、他の人の訓練の様子を後ろで聞いて復習する様子が見られた。

生活訓練指導員と静和園の関わりとしては、支援方法の研修会を実施しただけではなく、訓練を担当職員に見てもらい、訪問していない時に復習をしてもらった。自分で出し入れできるよう靴の置き場を決めてもらうなど生活場面の

支援方法を提案することもあった。静和園職員が外出の計画を立て、仙台駅で待ち合わせて施設内では行えないエスカレーター利用などの訓練を実施したこともあった。

(3) 視覚障害者の集い

静和園では視覚障がい者の利用が少しずつ増えていったが、利用する曜日が違うなどで、本人同士が顔を合わせることが少なかった。せっかく利用が増えてきたのだから、みんなで何かしたい、集まれる機会がほしいという声が出始め、静和園では新しく「視覚障害者の集い」を開始することとなった。

2005年8月、AさんからEさんまでの5名が参加し、静和園の職員1名が取りまとめ役となって第1回「視覚障害者の集い」が開かれた。それぞれが今の気持ちや、これからどんなことをしてみたいかなどが話し合われた。

ここから、月に1回のペースで集いが開かれ、2010年4月までに開催された回数は56回となった。

その中には、仙台センターを見学し、盲導犬の体験歩行をしたこともあった(2009年7月、第46回)。その他、歩行訓練を兼ねて公園へ出かけたり、おいしいと評判のラーメン屋に食事に行ったり、調理実習として役割分担をしてカレーを作るなどを行なった。情報収集のため、補装具・日常生活用具の説明を受けに地元の役場を訪れたり、近隣地域の視覚障がい者団体との交流会を開くなどもしている。

この「集い」では、利用者自身が主体となれるように、職員が企画立案するのではなく、話し合いで何を行なうか決定するようにしている。みんなで企画を立て、実行し、振り返りの会を開いて反省と次の企画を立てる、というサイクルである。視覚障がい者の他、ボランティアとして通所リハビリを終えた利用者(晴眼者)に来てもらっている。また、話し合いがスムーズに進むよう、静和園では視覚障がい者のひとりと、ボランティアとして参加している元利用者にピアカウンセリングの講習会を受けてもらい、会の運営の助けとなるようにした。

参加者はほぼ固定のメンバーだったが、最近では静和園の利用を考えている視覚障がい者が

試しに集いに来て一緒に出かけてみるなど、施設利用のきっかけとなるケースも出てきた。

また、外出の際には参加者の家族への報告として写真を撮り、文書にして渡しているが、それを見た家族が「まわりの人はみんな白い杖を持っているのに、うちのだけ持っていない。聞いてみたら便利そうなので、うちのにも持たせるようにしてほしい」という要望が出て、白杖を持つきっかけになったこともあった。

特に静和園が送迎をしている利用者は、家族が他の視覚障がい者と会うことが難しいため、家族へ報告することで、他の参加者がどんな様子なのかを知ることができ、情報提供の機会ともなっている。

4. 考察

静和園には視覚障がい生活訓練指導員がいないため、訓練センターから訓練提供の他、基本的な生活場面での対応についても提案した。静和園ではそれを取り入れ、車椅子利用者が多い施設内で、視覚障がい者が白杖を使って単独移動できるようにし、共に施設利用できるよう配慮している。さらに、独自の取り組みとして集いを開催し、継続できるよう支援している。施設と生活訓練指導員が相互に積極的に関わったこと、前例ができたことで視覚障がいを持つ利

用者が増え、新たな支援の展開が可能になったと思われる。

また、利用者にとっては、同じ障がいを持つ仲間が増えたことで、情報を共有できたり、精神的に支えあったりすることができた。

訓練センターとしては、自宅での受講を躊躇する利用者が多かったことから、訓練を実施しやすい環境で受講者を得ることができたというメリットがあった。

今回は静和園が使えるサービスを探し、仙台センターと連携を取ったことが始まりだったが、生活訓練指導員の側からも施設などに情報を発信し、連携を働きかけていくことが必要だと感じられた。

5. 最後に

視覚障がい者・生活訓練指導員は共に数の少ない存在である。視覚障がい専門の施設は限られており、多くの地域では他の障がいを持つ利用者や一般の高齢者と共に施設利用をしていることが多い。施設にとって、地域に視覚障がいリハビリテーションの専門家が存在していること、連携が取れることを知らないため、利用者へのサービス提供がスムーズに行なわれていないこともあるのではないかと推察された。